

図表1 類似ファンドを統一的な項目で比較すれば  
それぞれのファンドの本質が見えてくる

ファンド名	会社名	運用開始 日	運用資産 (百万円)	騰落率 (%)					最近収益分配金 受取状況			
				3カ月	6カ月	1年	2年	3年				
グローバル・ソブリン・ オゾン (毎月決算型)	投資信託 大和証券	1997/12/16	7,916	5,508.573	2.0	0.4	3.5	9.0	19.9	25.9	28.7	2001年11月以降 毎月約1万円
ダイワ・グローバル債券 ファンド (毎月分配型)	大和証券 投資信託	2003/10/23	10,535	1,646,547	2.7	-0.8	6.7	10.4	24.2	34.4		2005年2月以降 毎月約1万円

  

ファンド名	収益分配金 率 (%)	組入れ債券の状況		平均 最終 利回り	平均 最終 利回り	上限	信託総額	
		運用別分属のあり方	組入れ債券の 平均格					
グローバル・ソブリン・ オゾン (毎月決算型)	6.06%	ユーロ債42.9%、米ドル債22.9%、 ユーロ債10.7%、米債1.5%、 ユーロ債74.2%、カナダ債1.6%、豪 ドル債3.0%、ユーロ債2.2% ※ファンド別	6.3%	AAAT1, 3%	3.83%	4.49%	1.575%	1,3125%
ダイワ・グローバル債券 ファンド (毎月分配型)	9.11%	ユーロ債13.5%、カナダ債19.4% ※ファンド別	4.64%	AAAB, 2% AA1, 6% AA, 2%	5.11%	5.96%	2.10%	1,3125%

図表2 金利と株  
の動く方向性は  
同じか逆か？

年月日	国内金利		東証 株価 指数
	10年	東証 株価 指数	
2007.11	1.665	1635.78	
2	1.590	1600.17	
5	1.575	1575.13	
6	1.580	1574.59	
7	1.560	1556.69	
8	1.540	1516.94	
9	1.525	1494.35	
12	1.515	1456.40	
13	1.490	1454.73	
14	1.515	1497.71	
15	1.495	1498.86	
16	1.470	1471.67	
19	1.465	1456.61	
20	1.465	1469.27	
21	1.420	1438.72	
22	1.415	1437.38	
26	1.480	1467.03	
27	1.495	1478.78	
28	1.485	1475.64	
29	1.485	1514.47	
30	1.460	1531.86	
2007.12	1.450	1532.16	
4	1.410	1515.50	
5	1.490	1526.63	
6	1.550	1552.27	
7	1.565	1561.76	
10	1.560	1558.51	
11	1.580	1567.02	
12	1.530	1556.93	
13	1.510	1516.10	
14	1.545	1501.25	
17	1.545	1472.70	
18	1.530	1469.77	
19	1.485	1456.79	
20	1.520	1457.56	
21	1.550	1469.20	

※網目は前日比でマイナスを示す

あるいは「デュレーション」について説明するとなれば、「グロソブのほうに相当長い」ということは、同じような金利水準の変動

一方、「平均最終利回り」「平均直利」については、「ダイワ債券ファンドのほうに相当高い水準にあること」および「その大きな理由は、ダイワのほうに高金利利国通貨の債券組入れが多いことに起因する」と説明すればいい。もちろんここでは、債券の最終利回り直利の意味の説明が不可欠であることは言うまでもない。さらに「騰落率」の項では、過去1年以上の期間ではダイワのファンドのほうが高いパフォーマンス

「ニュージランドドル」の金利の高さや、一部の「北欧、東欧」通貨高の恩恵に与ったことが大きいとの説明が可能であろう。また、当該時点でこれらのファンドを購入した結果、毎月の収益分配金が購入元本に対して何%であるかというまさに債券における直利の概念を導入するとすれば、グロソブの6%強に対して、ダイワのファンドは9・1%に上ることが分かる。つまり、後者のほうが資産の取崩し効果が高く、その点前者のほうが長期にわたる資産形成には適しているとも言える。

初歩的なレベルで言うと、債券利回りの動きはそれ自体だけを見るのではなく、時々の株式相場との関連においてみる。日次ベイスで見ると、全36地点のうち金利と株価が同方向に動いたのが28地点(図表2)。つまり約78%の確率でこれらは同じ方向で動く。本欄で一貫して訴えていることは、「一つの現象は他の現象との関係において読むこと」だ。特にマーケットを読む際に際しては、この点を強調したいと思う。

なりともグロソブのほうに為替リスクが低い」「ユーロ債の組入れ比率に圧倒的な差がある」となる。それと同時に、ここで外債ファンドのリスクの程度を決める極めて重要な「デュレーション」についての最低限の説明が求められる。

「ニュージランドドル」の金利の高さや、一部の「北欧、東欧」通貨高の恩恵に与ったことが大きいとの説明が可能であろう。また、当該時点でこれらのファンドを購入した結果、毎月の収益分配金が購入元本に対して何%であるかというまさに債券における直利の概念を導入するとすれば、グロソブの6%強に対して、ダイワのファンドは9・1%に上ることが分かる。つまり、後者のほうが資産の取崩し効果が高く、その点前者のほうが長期にわたる資産形成には適しているとも言える。

「ニュージランドドル」の金利の高さや、一部の「北欧、東欧」通貨高の恩恵に与ったことが大きいとの説明が可能であろう。また、当該時点でこれらのファンドを購入した結果、毎月の収益分配金が購入元本に対して何%であるかというまさに債券における直利の概念を導入するとすれば、グロソブの6%強に対して、ダイワのファンドは9・1%に上ることが分かる。つまり、後者のほうが資産の取崩し効果が高く、その点前者のほうが長期にわたる資産形成には適しているとも言える。

初歩的なレベルで言うと、債券利回りの動きはそれ自体だけを見るのではなく、時々の株式相場との関連においてみる。日次ベイスで見ると、全36地点のうち金利と株価が同方向に動いたのが28地点(図表2)。つまり約78%の確率でこれらは同じ方向で動く。本欄で一貫して訴えていることは、「一つの現象は他の現象との関係において読むこと」だ。特にマーケットを読む際に際しては、この点を強調したいと思う。

「Aとは何か」が知りたいのか「Bとの違いは何か」を問えばいい。「彼ってどんな人？」に対しては「あなたより5センチ背が高く、あと朝はちよつとルーズなところがあるあなたとは違って、定刻の10分前には会社に来ているわね」というようにだ。

「グローバル・ソブリン・オゾン」と「ダイワ・グローバル債券ファンド」の違いについては図表1のとおりだ。そしてこの各項目につき説明していく過程で、これ

「ニュージランドドル」の金利の高さや、一部の「北欧、東欧」通貨高の恩恵に与ったことが大きいとの説明が可能であろう。また、当該時点でこれらのファンドを購入した結果、毎月の収益分配金が購入元本に対して何%であるかというまさに債券における直利の概念を導入するとすれば、グロソブの6%強に対して、ダイワのファンドは9・1%に上ることが分かる。つまり、後者のほうが資産の取崩し効果が高く、その点前者のほうが長期にわたる資産形成には適しているとも言える。

「Aとは何か」が知りたいのか「Bとの違いは何か」を問えばいい。「彼ってどんな人？」に対しては「あなたより5センチ背が高く、あと朝はちよつとルーズなところがあるあなたとは違って、定刻の10分前には会社に来ているわね」というようにだ。

「ニュージランドドル」の金利の高さや、一部の「北欧、東欧」通貨高の恩恵に与ったことが大きいとの説明が可能であろう。また、当該時点でこれらのファンドを購入した結果、毎月の収益分配金が購入元本に対して何%であるかというまさに債券における直利の概念を導入するとすれば、グロソブの6%強に対して、ダイワのファンドは9・1%に上ることが分かる。つまり、後者のほうが資産の取崩し効果が高く、その点前者のほうが長期にわたる資産形成には適しているとも言える。

角川総一の  
マーケット・リテラシー  
金融市場を読む、解く、話す力を養う  
File.019

個別ファンドについて分かりやすく説明する際の基本とは？  
類似するファンドと比較しその差を伝えることで本質を理解してもらう